

KJQ.PAPER

〈心の基礎〉リサーチ

〈心の基礎〉教育を学ぶ会メンバー

会長 菅野 純 綿井雅康 加藤陽子 藤井 靖 桂川泰典

第1号

2013 March

発行人 〈心の基礎〉教育を学ぶ会 事務局長 萩地一夫

事務局 株式会社実務教育出版 〒163-8671 東京都新宿区新宿1-1-12 TEL 03-3355-0921 kjq@jitsumu.co.jp

生徒たちの幼さ 大人心をどう育てるか

〈心の基礎〉教育を学ぶ会 会長
早稲田大学 教授

菅野 純

20年前に卒業したかつてのゼミ生が所用で来校し私の研究室に立ち寄った折、驚いた様子で語ったことがあります。「学生専用のバス内にこんな掲示が張られていました」。思わず携帯で撮ってしまったという写真には学バス内の掲示物が写っていました。そこにこう書かれてあったのです。「車内にガムの食べかすを捨ててはいけません。車内に汁物（カップラーメンなど）を持ち込まないでください」。その程度で驚くには値しない、と思う読者も少なくないでしょう。「公衆道徳」「マナー」という言葉が死語になつたのではないかと思えるような現実がそこここで見られるからです。卒業生は言いました。「何だか、中学校みたいになってきましたね」。確かに、大学生に対して中学生どころか小学生に注意するような言葉を発したことのある大学教員も少なくないのではないでしょうか。「おしゃべりを止めなさい」「勝手に立ち歩くな!」「授業が終わっていないのに教室に入って来てはいけない」「筆記用具は持つてこなかつたの?」…。

大学生たちのこうした現実から推し量ると、高校生、中学生、小学生ではいかばかりかと思います。社会的能力の未学習、未発達という大きな課題が現代の子どもたちには

あるのです。では、いかにして子どもの社会的能力を育てたらよいのでしょうか？ 私たちが『KJQマトリックス』を開発した大きな動機の一つがこれでした。私たちはこう考えました。

①子どもの社会的能力が形成されるためには、その土台として、心の安定や自己信頼感、他者信頼感がしっかりと形成されなければならない。愛情飢餓状態では子どもは「きまりを守る」「他人の迷惑を考える」どころではないからである。

②自己中心性からの脱皮のためには、いま自分がどのような状況に生きているのか、自分はこれまで何を獲得してきたのか、普段どのような行動をとっているのか、など自分の〈輪郭〉をはっきりとさせることが不可欠である。それも自分の力で行うことが大切である。

③客観視した自分をこれからどう補強し成長させればよいのか、その手がかりを具体的に得ることが成長につながる。こうした手がかりを教育の中で与えていく。

『KJQマトリックス』では社会的能力を生徒たちが獲得可能な「技術」として投げかけています。『KJQマトリックス』の「社会生活の技術」には私たちのこうした考えがあるのです。

徹底した生徒理解に 『KJQ マトリックス』を活用

藤枝市立青島中学校では、約10年前から『KJQ』を活用した生徒理解に取り組み、成果を上げてきました。3学年主任の深水美矢子先生に『KJQ』開発者の菅野純先生がインタビューし、『KJQ』活用のためのヒントをお伺いしました。

変化する生徒像

菅野：深水先生はここ3年間学年主任として『KJQ』を活用して生徒理解をしてこられました。その経験をお聞きしたいと思います。まず最初に今の中学生について感じていることを教えてください。

深水：『KJQ』に出会って7年、系統的に取り組んでから4～5年になります。最初に『KJQ』を使って指導をした生徒が大学1年生になりました。その子たちと今の中学生を比較すると、“甘えん坊”になりました。幼い子が多くなりました。以前は教員が力を入れて取り組んでいることは子どもに伝わっていると実感できたのですが、今の子どもの姿をみると果たして教員の思いが伝わっているのかなあと感じられることがあります。

菅野：その届き方の違い、根づきにくさは何だと思いませんか。

深水：言語に関する力（コミュニケーション能力）の弱さがあると思います。学校が家庭に発信することは子どもを通して伝わるわけですが、聞く力が弱かったり伝え方が幼かつたりすると、家庭へ伝わる内容は学校の意図したものとは違ってしまいます。こういった場面が増えれば増えるほど学校と家庭との距離が広がってしまうのではないかと危惧しています。

『KJQ マトリックス』で 多面的な生徒理解を

菅野：生徒がどんどん変化していく中で、先生方の生徒理解をサポートするためのデータを提供したいということです。

私は『KJQ』を開発したわけですが、『KJQ』を使って学級経営や学年経営をしてきて、その使い方や感想を教えてください。

深水：学年には若くて経験が浅い先生たちがいますが、この先生たちの資質を上げるには子どもをしっかり理解してもらうことだと思います。生徒の表面にあらわれたものだけを見るのではなく、その「あらわれ」を通してその子をどう理解していくかが大切です。学級担任の先生には朝は早く教室に行って生徒を観察してほしいとお願いしています。そうすると毎朝早く登校している子がいた場合、両親と一緒に朝早くに家を出なければならないということがわかつたり、さらに朝ご飯を食べていないこともあります。観察することによって、その子が早く来るという単なる現象からその子が抱えている部分が見えてくるのです。そして見えてきたことを言葉にして学年の先生方に広げていくと、担任ではない先生も授業を行ったときに見方が変わってくるし、授業を行っていない先生でも廊下で違ったときに「君って朝早いんだってね」などと声かけをすれば、生徒も先生に親近感をもつて何かあったときに先生に相談できたりします。ですから、観察して、話題にして、次の言葉かけにつなげて、というように、生徒を教員の間で共通理解するということを日常的に行っています。

『KJQ』のデータからは生徒の客観的な部分が見えてきます。たとえば「この子は普段はしゃいでいるから意欲タイプ群なのかと思ったら内向タイプ群じゃない、どうしてなのかな」といったように生徒の思ってもいなかつた部分が見えてきます。また生徒が『KJQ』の57の質問にどのよ

うに回答したかを見直すと、学校生活や家庭生活の中で生徒が普段感じていることがわかります。教員が生徒の行動を観察することは大事ですが、『KJQ』からはそのことだけではない生徒の情報を得ることができます。

『KJQ』のデータが戻ってきたら授業時間を2時間使って生徒にフィードバックしています。若い先生たちにはベテランの先生の授業を見てもらって、フィードバックの仕方を学んでもらいました。さらに二者面談や教員の研修会も行って生徒理解を深めています。研修会では若い先生に資料を提出してもらいます。それは、研修会を通してさらに生徒理解を深めてもらいたいのと、普段困っていてもなかなか言えなかつたことを研修会で話題にしてもらうというねらいもありました。

菅野：深水先生には学年主任として学年の先生方の資質向上を図るという役割があると思いますが、そのときに『KJQ』の「生徒を見る視点」があると若い先生にも伝えやすいし、『KJQ』のデータから生徒の表面だけではない部分も見ることができるということですね。

深水：『KJQ』には「こころのエネルギー」とか「社会生活の技術」という用語がありますよね。たとえば「今日はあの子『こころのエネルギー』がないよね」というように先生たちが共通の言葉で生徒を理解できるようになります。でもそうなるためにはデータをとつて終わっているだけではダメで、必ずフィードバックの時間をとることと、研修会をやることは大切なことだと思います。

『KJQ マトリックス』に期待すること

菅野：教員の研修会を行うことが難しいという学校はけっこうあって、そのための時間がない、どうやってよいかわからない、という声があるのですが、青島中学校では可能だったのですね。研修会がうまくいくために工夫したことありますか。

深水：学校体制で生徒の背景を理解しようとしていますし、研修会も教育課程の中に位置づけられています。管理職や養護教諭のバックアップも必要です。いろいろな形の力がうまく働いてここ何年かしっかりできたと思います。来

青島中学校での『KJQマトリックス』を使った指導の流れ（2012年度）

5月中旬 『KJQ マトリックス』を学年生徒に実施



6月上旬 『KJQ マトリックス』の結果が到着後、授業時間を2時間使って生徒にフィードバック



6月下旬 菅野純先生を講師に迎えて研修会を開催



7月上旬 『KJQ マトリックス』のデータをもとにした簡単な二者面談

年たとえば新しい学校に異動になったときに『KJQ』を導入しようとしてもうまくいかはわかりません。『KJQ』を学校にスムーズに導入するやり方を教えてくれるとありがたいです。もう1つは、自己肯定感の低い男子が多いので、そういう子たちへの声かけとかフォローの仕方のアドバイスが載っていると、若い先生にとってはいいのかなと思います。

菅野：ご意見ありがとうございます。『KJQ』がもっと学校現場で使いやすいものとなるために今後の課題として検討していきたいと思います。

先生の話をお伺いして基本は「熱意」なんだなと思いました。『KJQ』のような生徒理解の道具があっても、それを使って何とかしたいという気持ちがあることが大前提なのですね。深水先生の場合はご自分で『KJQ』を使うということのほかに、学年の先生方に使い方を教えたり、生徒理解の仕方を学べるように働きかけたり、生徒指導だけではなく先輩の先生として先生指導という役割を担いながら『KJQ』と関わってくださっているのですね。



菅野 純先生

深水美矢子先生

藤枝市立青島中学校 3学年主任。
数学科担当。

「〈心の基礎〉教育を学ぶ会」第1回 研究会レポート

2012年8月24日(金)にアルカディア市ヶ谷・私学会館にて、「〈心の基礎〉教育を学ぶ会」第1回研究会が開催されました。39名の方にご参加いただき会場は満員となり、盛況のうちに終了しました。その模様をレポートします。

プログラム	司会
13:00～14:00	綿井 雅康(十文字学園女子大学教授) ●講演 〈心の基礎〉教育とKJQの目的・内容 菅野 純(〈心の基礎〉教育を学ぶ会会長 早稲田大学教授)
14:10～16:10	●ケース検討会 ケース報告者 増田みちよ(藤枝市立藤枝中学校養護教諭) ケース検討者 3名 菅野 純／加藤陽子(十文字学園女子大学准教授) 桂川泰典(早稲田大学助手)
16:20～17:00	●講演 KJQを使った指導－まとめと課題 菅野 純

■講演 〈心の基礎〉教育とKJQの目的・内容

最初の講演では、会長の菅野純先生から、「〈心の基礎〉教育を学ぶ会」を立ち上げた理由についてお話をありました。以下はそのまとめです。



子どもの相談や学校教育にかかわっている中で、先生方が投げかけた教えがしっかり根づく子どもと根づかない子どもがいると感じてきました。その違いは心の中に教えが根づくための土台がしっかりとできているかいないかなでは、と考えるようになりました。子どもが成長していく過程はいつも順風満帆とはいきません。いじめの問題もそうですが、受験に失敗したりして挫折することもあるでしょうし、家庭環境がガタガタになってしまふこともあるでしょう。そういうことに負けないで生きていく力を子どもたちが身につけていくべきだと思うのです。心の勁さをもった子どもに育ってほしいというのが私の願いです。

学校教育の中で心を育てるというときに、子どもの中にしっかりとした心の土台をつくることが大事だと考え、〈心の基礎〉のモデルを提案しました。私が考える心の土台とは「〈人間のよさ〉体験」「こころのエネルギー」「社会生活の技術」で構成されています。生徒の問題行動を考えるときに、「社会生活の技術」が未学習だからなのか、「こころのエネルギー」がないからなのか、「人間のよさ体験」をしてこなかったからなのか、どこに問題があるのかを見極めて働きかける必要があると思います。「人間のよさ体

験」をしてこなかった子には「人間っていいものだということを私とのかかわりの中で1ミリでも2ミリでも感じてもらおう」という気持ちで接することが大事ですし、「こころのエネルギー」がない子には「こころのエネルギー」を満たしてあげるような働きかけが必要です。「社会生活の技術」がない子には具体的な方法をわかりやすく教えてあげるといった手続きが必要です。

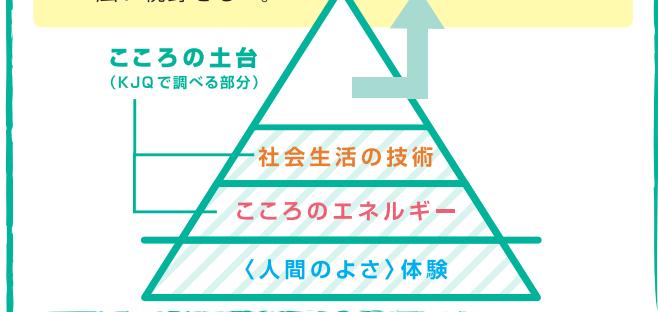
こういったかかわり方は学校教育ではすでに実践されていることですが、このような視点をもって子どもたちを理解してはどうかということを提案したいというのがこの会の趣旨です。そしてこのような視点から子どもたちをみる1つの手段として『KJQ』という心理検査を開発しました。



このあと、『KJQ調査』『KJQマトリックス』という2つの心理検査の説明がなされ、最後に「この研究会では先生方と学校の事例と一緒に研究して共に学んでいきたい」という抱負が述べられました。

しっかりした土台があって初めてできること。

- 例・自分の力を十分に発揮する。・世の中で活躍する。
- ・豊かな心で人と関わる。・積極的に取り組んでいく。
- ・広い視野をもつ。



■ ケース検討会

『KJQマトリックス』を受検した藤枝市立藤枝中学校の養護教諭増田みちよ先生に、『KJQマトリックス』の結果をもとに、学級経営が難しいあるクラスとそのクラスの生徒3人について概要を報告していただきました（個人情報保護の観点から実際のケースを改変しています）。

増田先生の報告に対して、ケース検討者の菅野先生・加藤先生・桂川先生から、『KJQマトリックス』に基づいたクラスや生徒の理解の仕方、今後のかかわり方についてアドバイスをしていただきました。3人の先生方からはさまざまな視点からのコメントや提案がなされ、生徒を見る視点の多様さを学ぶことができました。



参加者からも、普段接している生徒のようすを踏まえた活発な質問や意見があり、熱気のあるケース検討会となりました。

ケース検討者・ケース報告者・司会の先生方からケース検討会を終えての感想をいただきました。

《ケース検討者》

菅野先生



学級全体が騒がしくふざける生徒が多い一中学生のこんな行動の背後に何があり指導の手がかりは何かを『KJQ』が明らかにしてくれるのを強く感じました。

加藤先生



今回は、コメントする立場でしたが、各先生方やフロアの先生方の事例へのご意見を伺って、現場に携わる者として私自身大変勉強になりました。

桂川先生



ケース検討会は緊張感と想像力に満ちた時間だったのではないでしょう。ケース検討の場に「熱」を与えてくれる。『KJQ』の“効用”的な1つだと思います。

《ケース報告者》

増田先生



『KJQ』は、現象に振り回されていた学校現場に、本質的な子ども理解の必要性を改めて認識させてくれました。

《司会》

綿井先生



ケース検討会でとりあげたのは中学1年生でしたが、小学校の高学年から大学生まで集団と個人を理解するには、『KJQ』の基本的な考え方ほど有効だと感じました。

■ KJQ を使った指導－まとめと課題

参加者からの質問に答えたあと、最後に菅野先生の「今日が第1回の研究会で、中学校1年生初期のケースを見てきました。学年が上がったときにどう展開していくのか、高校生ではどうなるのかも取り上げたいと思っています。今後も皆さんと一緒に勉強するという姿勢で研究会を続けていきたいと思います。次回もぜひご参加ください。」という言葉で第1回研究会が締めくくられました。

ご参加いただいた方からは、「ケース検討会は実態に即した内容で非常に参考になった」「〈心の基礎〉の大切さを具体的にわかりやすく教えていただけてとても勉強になった」「『KJQ』の活用方法について理解が深まった」といったご意見が寄せされました。参加者の方々の講演に熱心に耳を傾けるようやアンケートの記述から、かかわっている子どものことをもっと理解したい、よりよい方向に導いてあげたい、という熱意を感じました。そのような思いに応えられるよう、次回の研究会を企画したいと考えています。

(事務局 檜山)

★お知らせ

「〈心の基礎〉教育を学ぶ会」第2回研究会を2013年8月23日(金)に実務教育出版ビル(東京都新宿区)にて開催予定です。詳細は事務局までお気軽にお問い合わせください!

問合せ先／事務局 実務教育出版 担当：檜山 tel: 03-3355-0921 kjq@jitsumu.co.jp

Q1 心理検査に対する疑問

生徒に心理検査をやらせても、どう解釈して、どのように日頃の指導に活かせばよいのかがよくわかりません。また、質問の内容によっては子どもたちのネガティブな面を引き出さないか（自信を失ったり、自分のマイナス面に注目しすぎる）が心配です。

A

確かに心理検査と呼ばれるものの中には、解釈や指導への応用には心理学の専門的知識や技能が必須なものもあります。しかし『KJQマトリックス』は現場の先生方が直接活用していただけるよう「教師用マニュアル」が用意されており、短時間で結果を処理でき、また結果は視覚的に把握できる（単なる数字だけではなく、グラフやマトリックスで個人や集団の傾向を把握できる）ようになっています。加えて、「生徒用ワークブック」を活用することで、子ども自身の自己理解につなげることが可能です。ですので、ぜひ開発的・予防的指導のきっかけとしていただければと思います。また結果から、生徒のプラスの（健康的な）側面を一番に大事にし、それを伸ばしていくという視点も重視するとよいでしょう。

（藤井 靖）

『KJQ』 Q & A 先生の質問にお答えします

『KJQ』に関する質問に
研究会のメンバーがお答えする
コーナーです。

★質問を募集しています★

このコーナーで取り上げてほしい
『KJQ』に関するご質問がございましたら、
メール（kjq@jitsumu.co.jp）にて
お知らせください。

Q2 高校生への活用法

単位制高校で高2の担任をしています。様々な背景を持った生徒が多いため、指導方法について悩んでいます。ヒントを得たいと思い『KJQマトリックス』の資料を手に取ったのですが、具体的にどんな活用法がありますか？

A

『KJQマトリックス』では、生徒の心の様子をることができます。したがって、それぞれの生徒の心の特徴に合わせた指導が可能になります。たとえば、「教師用シート」には、生徒のこころのエネルギー量や社会生活の技術の獲得度に加えて、日々の指導の参考になるような指導のヒントが書かれています。また、「生徒用シート」は、個別面談の資料として使用できます。得点の高低について一緒に考えることで、生徒自身は自己理解が、教師側は生徒理解がより深まるでしょう。進路指導前の自己啓発に使用することもできます。

また、『KJQマトリックス』では、各生徒のクラス内の位置を知ることで問題の早期発見が可能です。教師の予想した位置と異なる生徒が多い場合などは、クラスに何らかの変化が生じている可能性があります。

（加藤陽子）

Q3 保護者への説明の仕方

『KJQ』には興味があるのですが、クラスで実施することで保護者からクレームが出ないか心配です。
保護者にはどのように伝えたらよいでしょうか？

A

保護者へは、形式張った依頼文書ではなく、「学級便り」などを利用して『KJQ』を実施する意図を伝えます。保護者の多くは、子どもが学校からマイナスの評価を受けないか、心配しています。検査への誤解や心配を与えないよう「成績評価には関係がない」「子どもの問題を診断するものではない」「結果に良い／悪いはない」とことをしっかりと伝えます。そして、「子どもが自らの心の成長を客観的に〈理解〉する」「自分の〈良さ〉に気づき、意欲的に生きるためのヒントを見つける」といった『KJQ』実施の意図を伝えます。

学校が今、子どもたちにどのような力を身につけて欲しいと感じているか。先生方の「成長への願い」と一緒にお伝えしてもよいでしょう。

（桂川泰典）

『KJQマトリックス』の学級経営への活用(1)

— 学校コンサルテーションへの活用に向けて —

加藤陽子・綿井雅康

【問題と目的】

学級コンサルテーションには子どもに関する共通の資料を検討し合うことが欠かせない。『KJQマトリックス』は、生徒個人の心理状況だけでなく、クラス集団における個人の位置やクラス全体の傾向なども明らかにできる。そこで本研究では、『KJQマトリックス』の共通資料としての可能性を検討するため、マトリックスを用いた生徒理解および学級理解について、教師への聞き取り調査を行った。

【方法】

首都圏の公立中学校第1学年(W～Zまでの4クラス)に在籍する計132名(男子67名、女子65名)を対象に、2011年3月にHRの時間を利用して『KJQマトリックス』を実施した。その後、第1学年にかかる教師7名(学級担任・副担任・養護教諭:計7名)に対して、マトリックスを提示し、学級での生徒の様子および学級全体の様子についてインタビュー調査を行った。

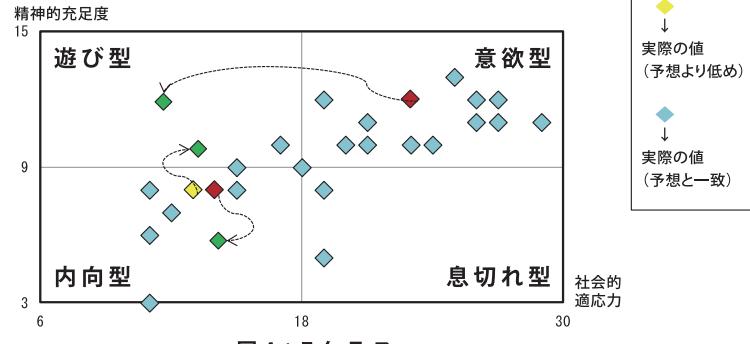
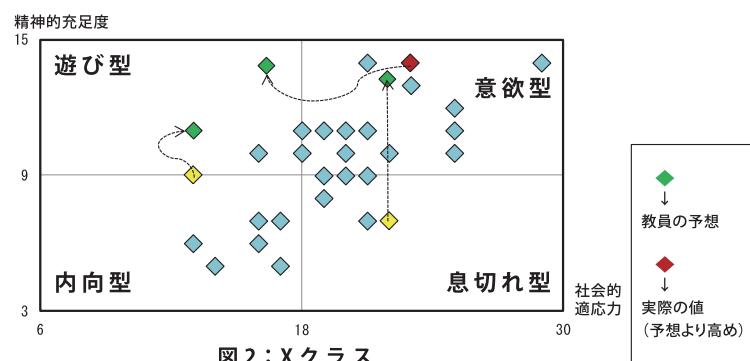
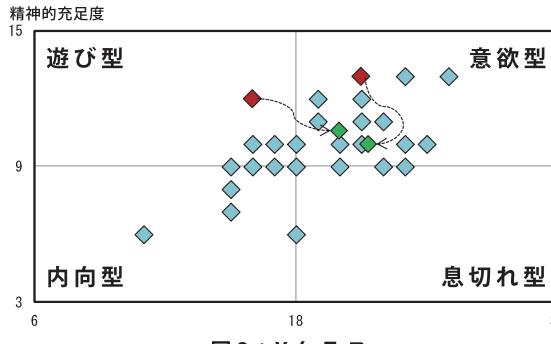
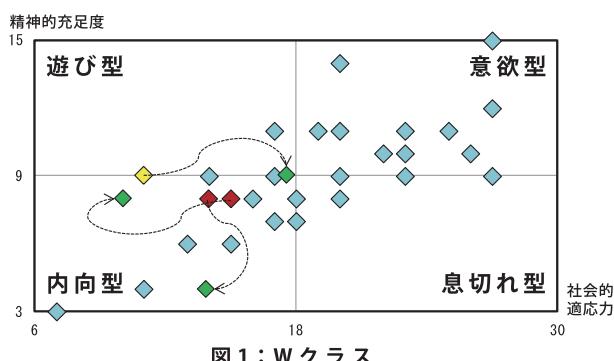
【結果と考察】

①マトリックスを用いた生徒理解:マトリックス上の生徒の位置について、教師の実感との差異を検討した。その

結果、132名中10名が教師の実感と異なった場所に位置していた。(図1～4)。なお、10名中1名の生徒は調査実施直前に保健室への来室が増えていたことが明らかとなった。このことから、マトリックスは生徒の心理状態を可視化できること、教師による問題の早期発見・早期対応に活用できることが示唆された。

②マトリックスを用いた学級理解:学級経営上の困難とマトリックス上の学級状態について検討した。その結果、Wクラスは、バラツキがみられたものの各々が役割を果たすことでバランスが取れていた。Xクラスは、精神的充足度にバラツキが多いが社会的適応力に差が少なく、安定感があった。Yクラスは、遊び型が多く、雰囲気に流れやすい学級で、実際に指導困難な場面が多かった。Zクラスは意欲型が多くまとまりがよく、静かな雰囲気であることが明らかとなった。以上のことから、マトリックスはクラスの現状を反映しており、今後の学級経営の指針を明確にできることが示唆された。

本結果より、『KJQマトリックス』は、教師の頭の中にある学級集団を明確に可視化し、学級理解と経営の展開案を得るための有用な資料であることが示された。ただし、生徒指導が必要なケースが明らかとなりにくい点は今後の検討課題である。



BOOK GUIDE

研究会のメンバーが学校の先生や生徒におススメしたい本を紹介するコーナーです。今回は桂川泰典先生（早稲田大学助手）が紹介します。



本を求める目的はさまざまだ。「知識の体系をつかむ本」「好奇心を満足させる本」「想像力をかき立てる本」「現実から逃れるための本」「いつか役に立ちそうな本」「愛蔵する本」「本と出会うための本」。

福井県出身の詩人、荒川洋治（1949—）の一連のエッセイ集（『忘れられる過去』『世に出ないことは』『黙読の山』ほか、みすず書房刊）は、「本と出会うための本」である。注意深く選びぬかれた言葉は、紹介される作品と氏との間にある「大切な関係」を写しとる。書評がもつ「おせっかい」は微塵もない。作品の紹介、というよりは、氏と作品の出会いに読者が立ち会う。そんな表現が、しっくりくる。

荒川は伝えている。大切な一冊に「出会う」時、ずっと前にその本に「会っていた」ということが、少なくない。でもその時は気づかないのだ。何度も目かに出会う。

カウンセリングの記録を読みかえす時、わたしはいつもハッとして、この話を思い出すのである。



忘れられる過去
定価 2,730 円
2003年7月発行



世に出ないことは
定価 2,625 円
2005年9月発行



黙読の山
定価 2,520 円
2007年7月発行

いづれも荒川洋治著、みすず書房刊

私のbeing

リレー
エッセイ
第1回



「こころのエネルギー」を補給する要素として「楽しい体験」がありますが、その一つとして「目的に何もしない」、つまり「being（ただ、いること）」はとても大事です。人は日頃「doing（何かをすること）」から成り立っていますが、それ以外の一見無駄に見える時間も、実は必要なものなのです。このコーナーでは、研究会のメンバーが日頃どのように「何もしないで」こころのエネルギーを注ぎ足しているのか、紹介してもらいます。第1回は、メンバー随一の『自称』おしゃれ番長である、藤井靖先生（早稲田大学助教）です。

私は、可能な限り月に一度は「ただ、過ごす日」を意図的に作ります。前日寝る前には「明日何をするか」を考えるのは禁止です。そして朝、何時に起きるかは決めません。時に、午後まで寝ているときもあります。それはそれで、素直な身体の反応なので、よしとします。お腹が空いたら、買っておいた菓子パンを、ベッドに寝ながらテレビを観つつ、食べます。たまに、ジャスミンティーをシーツにこぼします。これも、シーツがほんのりいい匂いになったと自分に言い聞かせ、よしとします（＊ティッシュで軽く拭きます）。そして突然思い立ったかのように、部屋の整理を始めます。途中、懐かしいサーフィン雑誌を見つけます。いつしか雑誌を読みふけります。部屋は全く片付きません。これも、まあ、よしとします。そうこうしているうちに夕方になります。一眼レフカメラを首から下げ外に出ますが、何か目的があるわけではありません。途中、近所のイタリアンで「トマトとモッツアレラチーズのパスタ バジル風味」を食べます。ブログは持っていないですが、一応写真を撮ります。店主の怪訝な視線を若干感じながらも、いい感じで写真が撮れてパスタも美味だったので、よしとします。あとは帰宅して、軽く安ワインを飲んで寝るだけです。…言うまでもなく、ある意味ただのだらしない一日です。でも私にとっては、ふと研究の着想が生まれたり、心が整理されてゆとりが出来るため、大事な一日です。

編集後記



創刊準備号に続いてここに第1号を発行いたします。本誌は、「生徒の心の成長につながる援助」を1つのテーマに、実践事例、研究報告、利用者の声などさまざまな視点から、今日的な問題の解決に向かい合いたいと思っています。

（事務局 萩地）

第2号は2013年7月発行予定です。